降誕祭主日礼拝説教「入ってみれば、幼子と母」予稿
日本基督教団石神井教会　2021年12月26日降誕節第1主日

【旧約聖書日課】イザヤ書　49章7～13節
7 イスラエルを贖う聖なる神、主は
人に侮られ、国々に忌むべき者とされ
支配者らの僕とされた者に向かって、言われる。
王たちは見て立ち上がり、君侯はひれ伏す。
真実にいますイスラエルの聖なる神、主が
あなたを選ばれたのを見て。
8 主はこう言われる。
わたしは恵みの時にあなたに答え
救いの日にあなたを助けた。
わたしはあなたを形づくり、あなたを立てて
民の契約とし、国を再興して
荒廃した嗣業の地を継がせる。
9 捕らわれ人には、出でよと
闇に住む者には身を現せ、と命じる。

彼らは家畜を飼いつつ道を行き
荒れ地はすべて牧草地となる。
10 彼らは飢えることなく、渇くこともない。
太陽も熱風も彼らを打つことはない。
憐れみ深い方が彼らを導き
湧き出る水のほとりに彼らを伴って行かれる。
11 わたしはすべての山に道をひらき
広い道を高く通す。
12 見よ、遠くから来る
見よ、人々が北から、西から
また、シニムの地から来る。
13 天よ、喜び歌え、地よ、喜び躍れ。
山々よ、歓声をあげよ。
主は御自分の民を慰め
その貧しい人々を憐れんでくださった。

【福音書日課】マタイによる福音書　2章1～12節
1イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。
6 『ユダの地、ベツレヘムよ、

お前はユダの指導者たちの中で
決していちばん小さいものではない。
お前から指導者が現れ、
わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」
7そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を
確かめた。8そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知
らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9
彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに
幼子のいる場所の上に止まった。10学者たちはその星を見て喜びにあふれた。
11家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼
子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12と
ころが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を
通って自分たちの国へ帰って行った。

クリスマスはどこに？【こども説教のために】

主のご降誕おめでとうございます。

アドヴェントのロウソクに導かれて四週の祈りのときを歩んできたわたしたちは、先週、五本目のロウソク、「降誕のロウソク」が灯される中で主のご降誕を祝うときを迎えました。そして今日、五本のロウソクが灯された日曜日の教会へと集められてきました。

「降誕のロウソク」が灯されるまでのときに、わたしたちは、世界中にクリスマスが溢れたさまを見てきました。御子キリストを礼拝する教会に留まずに、世界中の至るところに、クリスマスがありました。「クリスマス」と呼ばれる祝いが、教会の中には納まりきらないかのように、多くの人々の手に委ねられていました。「主のご降誕」というクリスマスに神が起こしてくださった御業が、教会やキリスト信者の手で受けとめきれないほど大きなものになっていることを、まざまざと見せられてきました。

けれども、「降誕日」を過ぎた今日、あの世界中に溢れかえっていたクリスマスは、急速にしぼみ、見る影もなくなってしまったようです。クリスマスは、「教会とキリスト信者」という元の鞘に収まってしまったようです。そうです、わたしたち教会は、今日もクリスマスの祝いのただ中にあります。今日だけでなく、今週も来週も、クリスマスの祝いのただ中にあります。

今年のクリスマスを祝い損ねてしまった、と思っている人があるのではないでしょうか。あの「もう一人の博士」の伝説で知られるアルタバンのように、御子のご降誕を祝い損ねてしまったと思っている人が、いるのではないでしょうか。それならば、「教会では、まだクリスマスを祝っている」とご案内して良いのです。

クリスマスは、ここ教会にあります。ここには、お生まれくださった御子を胸に抱く者たちが、今日も集まってきているのです。

家に入ってみると…

クリスマスイブの聖夜礼拝には、多くの方がお集まりくださいました。昨年は多くの方が出席を控えられたようでしたが、今年は、以前と同様に、この教会の信者でない方も大勢おいでくださいました。想定より多く、心配もありました。礼拝堂の混雑を見て、階下で参加してくださった方もあったようですが、お帰りになる方があったとは聞いていません。おいでくださった皆さんが、互いを信頼して、一つところに集まることを良しとしてくださったのです。

そこには、久しぶりにおいでくださった方もありました。クリスマスの祝いの最中にある教会は、不思議と、普段よりもずっと敷居が低くなるようです。そこで何が行われているのか、教会の外にいても、想像がつくのでしょう。そこに入って行って、想像していたのとはまったく違うことが行われているとは、だれも思わないのです。クリスマスイブの礼拝は、そのような期待に、教会がもっともよく応えている機会なのかもしれません。

今日、「降誕祭主日礼拝」としてご案内した教会には、クリスマスイブのように多くの方がいらっしゃるのでしょうか。教会の内に属する信者の皆さんは、もちろん励んでおいでくださるでしょう。信者ではない方、普段教会においでになられていない方、しばらく教会から遠ざかってしまっている方は、どうでしょうか。今日、せっかく来てくださっても、「クリスマスの祝いだと聞いていたのに、想像していたのと違った」と思われてしまうようなことが、ないでしょうか。

東方からはるばる星に導かれて「新しい王」の誕生を祝いにやって来たという占星術の学者たち（博士たち）は、その出来事が起こり、祝われるとすれば、きっと国を挙げての盛大な祝いが都で営まれるに違いないと、想像したのではないでしょうか。彼らは、まず、壮麗な神殿や王宮が立ち並ぶエルサレムの町に入って、人々に尋ねたのです、「**ユダヤ人の王としてお生まれになられた方は、どこにおられますか**」と。しかし、彼らは、招かれた王宮に入っても、それらしい祝いの気配を見ることはなかったのです。

その彼らが再び星に導かれて訪ね宛てたベツレヘムという小さな町で、ここという家に入って行ったとき、学者たちは、「想像していたのと違った」とは思わなかったのでしょうか。そこにいたのは、一人の幼子と、その子を抱く母だけだったのです。幼子の誕生を祝う客人が来てくれたというのに、父親は不在だったのでしょうか。もてなしもされない、ただ幼子を抱く母がそこにいるだけの部屋で、学者たちは、途方に暮れるようなことはなかったのでしょうか。彼らはただ、ひれ伏して幼子を拝み、贈り物を渡すと、祝いのみやげの一つも受け取らずに、帰って行ったのです。

幼子は「母」と共に

日曜日の礼拝でクリスマスを祝う教会にお迎えした皆さんの中には、もしかすると、今わたしが想像したような学者たちの気持ちを抱いて、ここから帰って行かれることになるかもしれません。「礼拝はした。献金もした。でも、教会は何もおみやげを渡してはくれなかった。手元には、受付で渡された印刷物ばかり。がっかりだ」と思われて帰られる方がいらしたら、申し訳ないことです。

でも、おそらくわたしが今想像してお話しした学者たちの気持ちは、聖書の物語が語っていることとは違うのでしょう。もしそうだったとしたら、この出来事は、後の教会で語り伝えられることも、物語り続けられることも、なかったはずです。彼ら学者たちは、もっと別のものをそこで見つけて、大切なものを受け取って帰って行ったはずなのです。

彼らがその家に入って行って見たのは、ひとりの幼子と、その幼子を抱く母の姿でした。いいえ、これを母と子ふたりのこととして見たのではありません。母の胸に抱かれた幼子、幼子を胸に抱く母、それは一つの姿であったはずです。二人は、ひとときも離れることなく、いつも一緒にいたに違いないのです。幼子が幼ければ幼いほど、母とその子は一つであったでしょう。学者たちが見たのは、そのような母と子の一つである姿だったのではないでしょうか。

彼らが見たかったのは、ただ「**ユダヤ人の王としてお生まれになった方**」でした。「新しい王」その人ひとり。それが、彼らの見たかったものだったはずです。けれども、彼らが家に入っていったとき、「**幼子は母マリアと共におられた**」のです。それが、彼らの見た「新しい王」の姿でした。誕生のときから孤高の高貴な存在とされ、母の手からさえ引き離されるような「王の子」の姿ではなかったのです。母の胸に抱かれているしかない幼子に過ぎない者。それが、彼らの捜し訪ねた「新しい王」の姿だったのです。

神の御子のご降誕を祝うためにお集まりの皆さん。わたしたちの迎えた御子は、母と共にいる必要のあるお方です。母となる者がいなくては、ひと時も命をつなぐことができないようなお方です。母としてその子を四六時中、胸に抱く者のもとに、このお方はお生まれくださるのです。その真実を、東方からやって来た学者たちは、あのベツレヘムの家に入ったときに、知ったのです。わたしたちも、御子を抱く母たちの集まる教会に入ってきたとき、そのことを知るようにされたのです。

そのわたしたちが、今は、母マリアと共に、幼子である御子を胸に抱いて、この家、教会でお待ちしているのです。この時代に生きる学者たちの来訪を。「新しい王」を捜し求めて来るすべての人のおいでを。